

ハワイの高齢新1世の定住先～結婚移住した女性たちに着目して～

The Settling Place of Aged Sin-Issei in Hawaii:
Focusing on Women who have Migrated for Marriage

牧田幸文 (福山市立大学)

MAKITA, Yukifumi (Fukuyama City University)

キーワード: エイジング 移民 女性

1. 研究の背景と目的

近年グローバル化により多くの人たちが生まれた国と違う場所で高齢期を迎えている。異国で老いを迎える人たちとその暮らしについては、老年社会学、エスニシティや移民研究の分野において新しい研究テーマの一つとなっている (Phillipson, 2015)。欧米の高齢移民については、各国の福祉政策と移民政策の実情に合わせて、移住の動機と医療、福祉そして家族関係を分析する研究が蓄積されている。これらの研究では、高齢移民は、ホスト国で暮らす、あるいは自国に帰国する、定年になって移住するなど多岐にわたっていることが明らかにされている。日本人及び日系人の高齢化については、移住先でのケアの実情とニーズ、異文化への適応 (中島・遠山 2020) に関する研究がある。これらの調査では、言語・文化によるきめ細かいケアと施設を望む人が多く、それは日系人が集住していない地域での要望であることが明らかになった (中島・遠山、2020)。また子ども世代の負担にならないケア希望が強いことも明らかにされている (Kawakami and Son, 2015)。結婚で海外へ移住した日本人女性に焦点を当てた研究では、戦争花嫁のオーラルヒストリー (Crawford, Hayashi and Suenaga, 2009) やハワイ日系女性高齢者によるプランテーション生活の語り (Kinoshita, 2006) がある。しかし、異文化で高齢期を迎え、医療やケアに関する不安等については明らかにされていない。そこで本研究では、ハワイ州に暮らす新1世女性を対象に、異文化の中でどのように適応しながら暮らし、どこで老いを迎えようとしているのか、そして医療やケアにどう対処しているのかを明らかにする。特に人々の多様な経験は高齢期の暮らしを形成するというライフコースアプローチ (Bengtson, Elder and Putney, 2005) に着目し、老いを迎えようとしているハワイの新1世の状況を明らかにする。

2. 調査方法

本研究は、2023年3月と8月に合計22日間、ハワイ州でのインタビュー調査と参与観察データをもとにしている。インタビューは、オアフ島にある本願寺とコミュニティセンターのシニアクラスに参加する50歳以上の女性26人に実施した。インタビューでは移住の経緯とハワイでの暮らし、定年、医療、介護と今後のプランについて聞いた。参与観察は調査対象者が参加した日系人コミュニティの活動場面 (体操、日本文化活動、チャリティ、掃除、寺でのサービス) で行った。

3. 調査結果

今後暮らす場所については、移住先で高齢期を迎える、リターンマイグレーション、国際定年移住に分けた (表1参照)。調査では21人がハワイで老いを迎え、「お墓も用意した」と語る人もいた。70歳以上の対象者は、「日本の家族も高齢になり、頼るところがない」と、日本の選択肢がないようであった。配偶者の国籍の違いは定住先の選択に影響せず、むしろ、ハワイ (もしくは本土) に頼りにできる成人の子どもたちがいることが、ハワイに定住することの要因となっていた。医療やケアの場面では、子どもたちに相談、通訳をしてもらいながら乗り越えている。11人が日本人ネットワークを活用して仕事をしており、日系人及び新1世ネットワークから情報を取り入れて活動的であった。

調査対象者の中で3名が日本への帰国を希望していた。日本人配偶者たちは、ハワイに住み続けること

を希望しているが、彼女たちは帰国を考えていた。一人は、夫が手術してすぐに退院したため、看護の負担、医者とのやりとり、書類の難しさを感じ帰国を強く望んでいた。日本人夫婦だけの世帯では、妻が英語でのやりとりに不安を持ち、年齢を増すとその傾向は強いようだ。

国際定年移住の2人は、アメリカ本土からハワイへ移住していた。本人及び配偶者の病気を機に、ハワイ特有の天候と日本人コミュニティがあるという、暮らしやすさが移住の理由であった。これは欧米で多く見られる国際定年移住と同じ理由である。日本への帰国を選択しなかった理由は、市民権、メディケア、そして日本社会とのギャップを挙げていた。

表1) 高齢移民の定住先

	移住先で高齢期を迎える	リターンマイグレーション	国際定年移住
夫が日本人	7	3	1
夫が日系人	8	0	0
夫がアメリカ人	6	0	1
総数	21	3	2

4. 考察と課題

本研究の結婚によって移住し、高齢期を迎えた女性たちは、違う言語、社会制度、文化の中で、不安や変化に対処しながら暮らし、彼女たちの半数以上の21人がそのままハワイで暮らすと決めていた。その多くがハワイにある日系人・日本人ネットワークを通して仕事あるいは趣味サークルなどの活動に参加していた。心配要素である医療やケアに関しては、子ども世代の助けが鍵となっていた。インタビューでは「日系人と関わりがない」と語った人が数人いたが、彼女たちは日系人がハワイで長年形成してきたコミュニティの繋がりを活用していることが明らかになった。調査対象者は寺、日系コミュニティセンター、日本人サークルを通して集めたため、日系人の社会ネットワークから漏れた高齢新1世女性についての実情については、今後の課題となる。

参考文献

- 中島民恵子・遠山（金本）伊津子（2020）「ニューヨーク及び近郊に在住の日本人・日系人における在宅介護ニーズの現状と課題」『日本福祉大学社会福祉論集』第142号、pp.145-154.
- Bengtson, V. Elder, G. and Putney, M. (2005) The life course perspective on ageing: linked lives, timing, and history, in *The Cambridge Handbook of Age and Ageing*, edit. Johnson, L. Malcolm.
- Crawford, M. Hayashi, K. and Suenaga, S. (2009) *Japanese War Brides in America an Oral History*. Praeger.
- Kawamoto, A. and Son, J. (2015) “I don’t want to be a burden”: Japanese immigrant acculturation and their attitudes toward non-family-based elder care. *Ageing International* 40(3), DOI:10.1007/s12126-015-9220-8.
- Kinoshita, G. (2006) *Us, Hawai’i-Born Japanese: Storied Identities of Japanese American Elderly from a Sugar Plantation Community*. Routledge.
- Phillipson, C. (2015) Placing ethnicity at the centre of studies of later life: theoretical perspectives and empirical challenges. *Ageing & Society* 35, pp.917-934.